

蒲田モダン研究会がやったこと (相関と系譜)

蒲田モダン研究会がやってきたことをキーワードにして大雑把にカテゴリ分けしてまとめてみました。それぞれはそれぞれの相関関係が繋がっていききました。全体はまるで曼陀羅のようで、更に次なるカテゴリに繋って膨ら張っていくかのようです。

モダンの何?

明治の開国以後の日本の近代化の過程で、西歐風の指板けてオシャレな風情のことのようです。

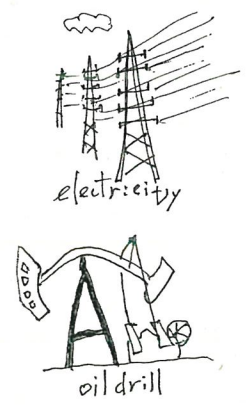


蒲田モダンって何?

東京大田区の蒲田の地で、主に第一次世界大戦(1914-1918年)以降に進んだ近代化のプロセスで、西欧の文化や技術や意匠を取り入れながら、豊かさや便利さや美しさを求めて表現されたモノや形、住った人々。

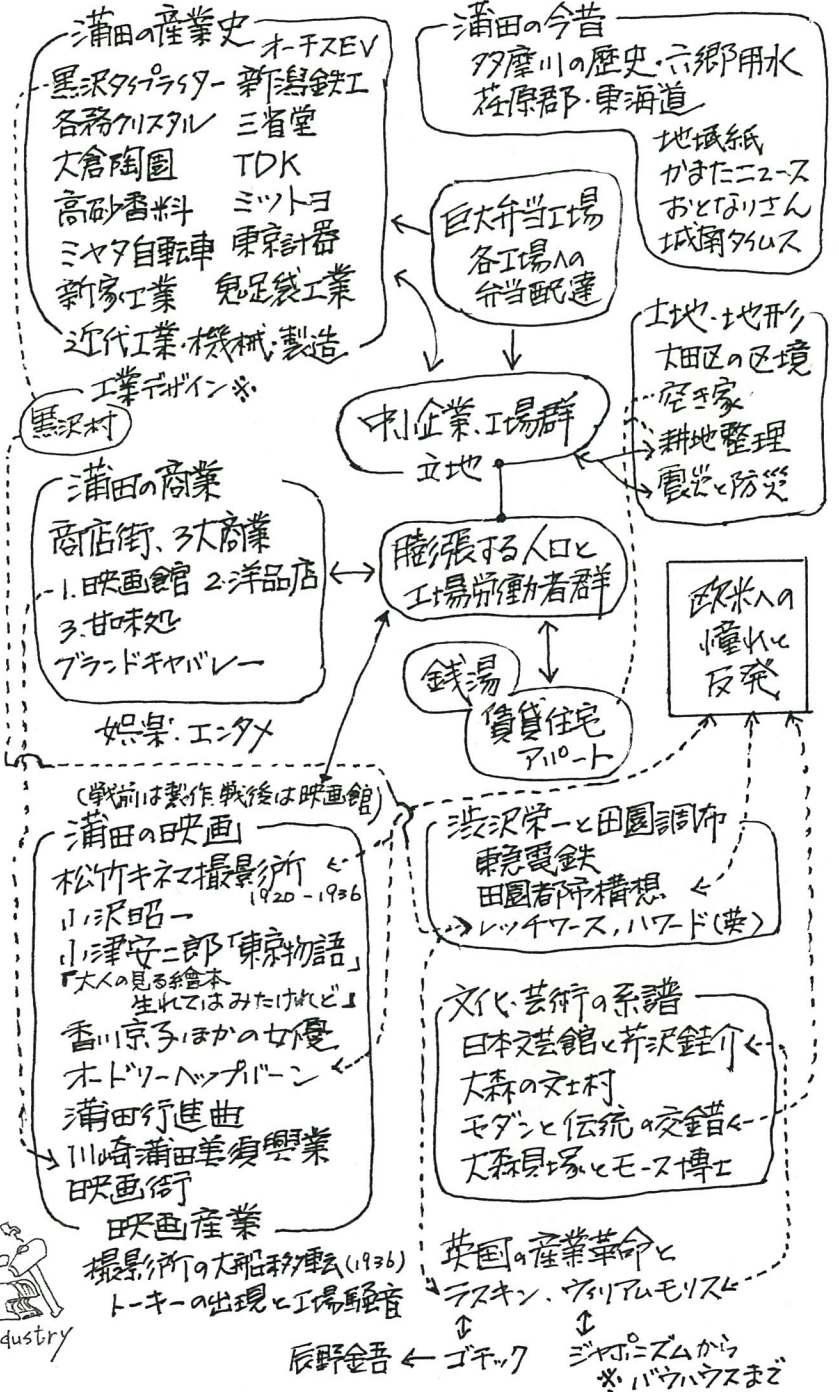
研究会での知見

私たちはやってきた蒲田のモダンの解明作業には様々な切り口とアプローチがありました。結局は私たちが「知るべき」を知るという作業もありました。



(右の図の注記)

1. 大工場の元には中小工場が大量に立地し、中小工場同士の「仲間回し」という仕事を介する体制が生まれました。
2. 工場が増えるに就業者も増え、商店街、賃貸住宅、銭湯が増加。工業と商業の相関関係が生まれ、戦後は工員の食事を提供する配達弁当サービスが大きく発展。
3. 人口が増え、娯楽やエンタメメントのニーズが生まれ、映画館が沢山ありました。
4. 東京東横線、目蒲線(現汐留線)、池上線も住宅地の拡大と共に発展しました。
5. 日本の近代工業は欧米の模倣から始まり、欧米の製品の機能や素材、デザインなどのアソシエーションに敏感に反応しました。
6. 産業や製品だけでなく人や情報も含めて、大きな相関関係が形成されていきました。



<欧米文化への憧れ>

明治時代の日本近代化の開始とともに、様々な欧米文化が日本に入ってきました。これは西欧の伝統でもあり、また産業革命で生まれた先進技術と製品でもありました。これは日本人の目を奪うような輝きをもった品々で、長期間憧れの対象になりました。これは今、日本では100年の時代を経ても「レトロからよく」私たちが心を捕えます。

<産業発展の二面性>

産業発展は豊かな生活や美しい文化芸術のエネルギー源もあり、一方で戦争を平手助けする兵器や軍備の技術開発と増強のエネルギー源でもありました。この戦争に向かうエネルギーが複雑な国際環境の中で、日本が戦争に突入していく中で、便利な道具として利用されていくことも忘れてはならない事だと思えます。



(下の図の注記)

1. 文明開化以後、モダンは日本各地で用いられた。研究会は銀座や横浜のモダンや伝統の融合(京都)や、米国の色々の模倣品なども取り扱った。
2. 大田区蒲田も東京工業地帯の一角を占め、この地帯一帯が日中戦争(1937-)から第二次世界大戦に至るまで、その生産面において大きく戦争に協力していった。

隣町
 大森(海苔の産地、江戸から)
 洗足池
 城南島
 東京工業地帯 川崎 鶴見
 久が原、セミ

東京工業地帯
 東京運河 - 羽田空港
 浅野総一郎
 味の素
 明治製糖
 京急電鉄

日本特殊鋼
 クレイト
 東京電機工業
 屋島勇一、いぼ
 日本自動車

他所(よその)モダン
 銀座モダン
 横浜モダン
 京都モダン
 横濱とアソシエーション文化
 東京F町探訪(赤羽)

重工業と戦争
 オキ金属銀行
 松方正義
 日本財閥
 新製鋼(成金)

魚川財閥、久原財閥
 ダットサン、日産
 蒲田重工業
 大谷重工業(羽田)

記事 廣瀬 (with カット)